存在理由　from ゴッドイーター

.黒鬼風斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
存在理由　ｆｒｏｍ　ゴッドイーター

【Ｎコード】
Ｎ７６６８Ｍ

【作者名】
・黒鬼風斗

【あらすじ】
この世界には“喰らうモノ”と“喰らわれるモノ”がいる。
人、動物、植物――そして、“アラガミ”。
それら全ての生物が、何かを喰らい、何かに喰われる。
それが大自然の摂理だと理解する間でもなく、私はずっと、本能のままに獲物を喰らい続けてきた。
そして私自身が喰われないように、必死に敵に抗って生きてきた。
だけど――。

アラガミとして存在していた筈の一体のサリエル。しかし、突如として「人」としての感情を覚えてしまう。人を喰らうことを躊躇する自分を嫌悪するサリエル。そんな彼女の前に現れた一人のゴッドイーター、コウタは彼女に優しく語り掛ける。
だが、楽しい時は長くは続かなかった――……。

某コミュにて掲載した作品です。人に最も近い姿のサリエル。彼女にもし人間としての感情が芽生えたら……など妄想して書いたものです。コウタ、アリサ、ソーマ、サクヤの他に「主人公キャラ」も登場します。
４／２５、読みやすいように話数を増やしました。

プロローグ（前書き）

某コミュにて掲載した作品です。人に最も近い姿のサリエル。彼女にもし人間としての感情が芽生えたら……など妄想して書いたものです。コウタ、アリサ、ソーマ、サクヤの他に「主人公キャラ」も登場します。

プロローグ

この世界には“喰らうモノ”と“喰らわれるモノ”がいる。
人、動物、植物――そして、“アラガミ”。
それら全ての生物が、何かを喰らい、何かに喰われる。
それが大自然の摂理だと理解する間でもなく、私はずっと、本能のままに獲物を喰らい続けてきた。
そして私自身が喰われないように、必死に敵に抗って生きてきた。

だけど――。

……目の前に広がる真っ赤な血の海。その上には身体に大きな穴が開いたり、手足が千切れていたりする多くの人間が横たわっている。私はこれまでそれに何も感じる事はなかった。獲物の動きを止め、そして喰らう――ただ、それだけでしかなかった。
宙に浮いている私はいつものようにゆっくりと高度を下げ、血の海へと着地する。生暖かい感じが足に伝わるのが、私には心地がよかった。ビチャ、ビチャと音を立てながら生け捕ったばかりの獲物へと近付く。

「う……あ、ぁ……」

獲物――一人の人間が口をパクパクさせながら嗚咽を漏らす。鍛え上げた筋肉を衣服から覗かせている、大人の男だ。人間にはいくつか種類があり、男や女だけでなく、その体の成長具合からも味が異なるのが面白い。……この男の肉は少し固そうだが、その食感が

また良い。
私は静かにその男の顔へと自分の顔を近づけた。途端、男が金切り声を上げながら後ろへ下がろうとする。もちろん、横たわっている状態で――そもそも身体を私に撃ち抜かれている状態で満足に動ける筈もなく、それはただ徒労に終わった。

その時だった。

小さな音と共に、私の頭に何かがぶつけられたのは。

コツン、と音がしたのとほぼ同時に何か小さなものが血の海に落ちる音がした。痛くもかゆくもなかったが、男から目を離してゆっくりと振り返る。そう、邪魔するのは誰だ、と言わんばかりに。

「――お父さんを食べないでっ！！」

小さな女がそこにいた。背丈は先ほどの男の半分くらいだろうか、とても細く華奢な身体をしている。目から大粒の液体を零しながら何かを叫んだが、私は人の言葉を理解することができない。もちろん、人の言葉を話すこともできない。
私と女の目が合う。その瞬間女はビクンと身体を震わせ、一歩後ろへと下がった。……どうやら怯えているらしい。それでも女は歯を食い縛って地面に落ちている小さな小さな石を拾っては私に投げつけた。だけどそれの多くは私に当たることもなく、当たったところで私に傷一つ付けることもない。
私は一旦男へと視線を戻した。男のその視線は私ではなく女に向けられている。何か言葉を発して女へ訴えようとしているのか、苦しそうな表情で、それでも必死に口を開かせ続けている。だけどその口からは小さな嗚咽が漏れるだけで、言葉として女に届きはしない。

ぺろり、と私は舌で口元を舐める。この大きさの女の肉は身体の大きさに比例して私のお腹を満たせることさえできないが、とても柔らかく、甘くて美味なのだ。

当然、私はまず女から喰らう事にした。

「ひ……っ！」

一歩、そしてまた一歩。女へと足を歩める度に女も金切り声を出しながら一歩、そしてまた一歩下がっていく。それでもその女は私を睨み付け、必死に石を投げ続ける。

愚かだ、と私は思った。“喰らわれるモノ”が死を抗う姿というのは実に滑稽だ。

「お父さん！　今のうちに逃げてっ！！」

私は歩みを止めない。ゆっくりとゆっくりと女へと歩むが、女もその度に後ろに下がるから一向に距離は縮まらない。

「お父さん！　お父さんお父さんお父さんっ！！」

……耳障りだ。

私は瞬時に女の背丈の5倍ほどの高さまで舞い上がると、そのまま女の喉目掛けて急降下した。この速さに普通の人間が反応できる筈がない。当然の如く、私は易々とその女の喉に喰らい付いた。

「おと――……っ！！」

ゴキッ、という音と共に私は女の喉を噛み砕く。もう女が耳障りな声を出すことはなく、ただ口からは甘い匂いのする血を吐き出すだけ。私はまずその匂いに惑わされるかのように、自らの口で女の

口を塞いで泉のように湧き出てくる血を啜った。
甘い。癖になりそうな味だ。
一通り啜ったところで私は女の身体を地面に仰向けに押し倒した。ビクンビクンと身体を痙攣させていたが、ゴポッと最後に口から血を吐いてやがて動かなくなった。
背後から何か唸り声が聞こえる。言葉にならない悲鳴、といったところだろうか。私はそれを気にも止めず、倒れて動かなくなった女の傍に着地すると、そのまま身を屈めて女の肉を喰らい始める。グチャ、グチャと品のない音を立てながら私は欲望のままその肉を貪った。
やがて私はゆっくりと半身を持ち上げると、恍惚と空を見上げた。女はもう見る影もないくらいに骨や内臓を地面に散らかせている。私はもうそれには目もくれず、最初の男へと向き直った。私のお腹はまだ満足していない、もっともっと喰らいたい！

「て……めぇ……っ！」

私は呆れた。私の光線で撃ち抜かれた身体で立ち上がり、先ほどの女と同様に目から大粒の液体を零しながら私を睨み付けるその男に。
ただ気色が悪かった。口から食べたばかりの女の血肉を吐き出しそうになるくらいだ。
食欲が失せた私が憂さ晴らしにやる事は一つだけ。バサリ、と私は両翼を大きく羽ばたかせると同時に光の玉を生じさせる。その刹那、光の玉から光線が男に向けて放射された。
立っているのがやっとだった男はそれを避ける事もできなければ身体を動かす事もできない。放たれた光線が一直線に男の顔面を貫くと、男は再び血の海へと身を落とす。何か言いたげだったその口は、もう何も発することはなかった。
血の海にはまだ何人も倒れている人間がいる。まだ生きているも

の、既に息絶えてるもの、様々だ。だけど先ほどの男のせいで食欲を失った私は、それらを見ても食べたいとは思わなかった。このまま放置して血の匂いを嗅ぎ付けたものに譲ってやろうかと思ったが、自分が捕らえた獲物をただ喰われるのは癪だった。
だから私は、もう一度空を見上げた。頭にある第三の瞳に力を集中させ、それを一気に空に向かって放射しようとした――ちょうどその時だった。

ドクン、と全身の細胞が脈を打つ。
身体が震え始め、目に映る視界も大きく揺れ始める。
捕食したばかりの血肉がまるで意思を持ったかのように私の口から次々へと溢れ出る。

やがて、私の視界は別のものを映し始めた。
先ほどの女と男が暮らしている様子、遊んでいる様子、喧嘩している様子――……。

――何なの、コレは。捕食した女の記憶だというの？

何かが私の中で爆発していく。
怒り、悲しみ、喜び、楽しみ――ありとあらゆる感情が私の身体を支配していく。

「嫌ァ……ゥアアアアァァァァッ！！？」

私の口が勝手に人の言葉を発し始める。こんな事は初めてだった。

苦しい――……とにかく、苦しかった。

「ワタシ……私、ハ……ッ！！」

両翼で頭を抱えながら、私は悶絶した。気がつけば地面に両足を付き、ただひたすらにもがいている。胸が酷く締め付けられる。まるで、“人の心”でも持ったかのように。
ゲボッと身体に残っていた女の血肉を吐き出し、私は荒々しい呼吸を落ち着かせようとする。だけどこの苦しみから全然解放されず、私はただひたすらに地面を翼で殴ったり光線を放っては建物を壊したりを繰り返す。

だから、一発の銃声に気付けなかった。

――ドンッ！！！

「キャウッ！！」

正面から放たれた弾丸は頭の第三の瞳に直撃し、私はそのまま後ろへと吹き飛ばされた。私はすぐに体勢を整えて宙に浮かび、荒々しい呼吸のまま弾丸を放った人間の姿を確認する。
一人の男だった。腕輪と銃を装備した男――その姿から“ゴッドイーター”であるとすぐに理解した。

「――街をこんなにしやがって！！　お前に喰われた人たちの無念、今ここで俺が晴らせてやるからなっ！！」

朦朧とする頭で、私は今人の言葉を理解している事を知った。頭を攻撃されたからじゃない、と私は悟った。でも、何故だか全然理解できなかった。
本来なら捕食されまい、と反撃に転じるところだが、私は混乱していた。こんな訳の分からないまま、喰われる訳にはいかない！
男が再び銃を私に向け、トリガーを絞る。瞬時に放たれた弾丸が

私に向かって飛んでくるが、私は急上昇してそれを避けるともう振り返ることもせずにそのまま高く高く舞い上がる。『逃げるな』などといった罵声が下の方から浴びせられても、私はとにかくその場から離れたかった。

ただ、とにかく、冷静になりたかった。

1. 理解

……あれから何度夜が明けたか覚えていない。
“あれ”以来、私は人も“アラガミ”も、獣でさえ口にしていない。こうしてお腹の虫が『くぅぅ』と鳴くのも、初めての経験だった。
決して誰も近づけない、遥か空の上の雲の中。私はずっとそこで身を隠し、物思いに耽っていた。ここにいればどんな喧噪にも巻き込まれる事はない。せいぜい捕食できずにお腹が空くくらいだ。陽の光が時折眩しいけど、目を閉じていれば何の問題もない。
そっと右翼で頭に触れてみる。あの時、“ゴッドイーター”に壊された第三の瞳は今もなお回復の兆しさえ見せてはいない。

「……どうなってしまったんだろう、私の身体は」

ポツリと呟く。いつの間にか完全に人の言葉を理解し、こうして口にもできるようになってしまった。こんな“アラガミ”、絶対におかしい。
そう、私は人から“アラガミ”と呼ばれる存在。その中でも“サリエル”と呼ばれる存在……らしい。先日捕食した女の記憶と思しき断片から得た情報だからとても曖昧だ。

私はどうやら、人間を理解してしまったみたいだ。

数日考えて出た結論。あの女――少女を捕食した瞬間から、私の中で何かが変わり始めている。それは今でも同じだった。今もなお、私は頻繁に頭痛や胸が締め付けられるような苦しみに苛まれている。決まって視界に映るのは人間の記憶の断片だった。それが、私を狂わせている。

私は“アラガミ”だ。人間なんかじゃない。

そう分かっていても、私は“人間らしく”なってきてしまっている。いつか人間として地上へ降り立つ事ができたら――なんて馬鹿馬鹿しい事を考えるようになってしまった。多分、そんな事は一生できない。

お腹の虫が鳴く度に思い出すのは、やっぱり人間の味だから。きっと私は地上へ降りたら真っ先に人のいる街へと向かい、捕食してしまう。それは生物として当たり前の事をしているだけなんだ、と頭では分かってはいる。どんな生物も喰らい、そして食らわれて世界は永遠に循環していくものなんだ。

分かってはいる。分かってはいるんだけど……。

それでもやっぱり、地上へ降りて人間を捕食してしまう事が怖くなってしまっている。それは単純にまたあの苦しみを味わわなければならないからなのかもしれない。でも多分、私は怖いのはもっと単純な事だ。

人間を捕食すれば、人間から離れてしまう。人間に忌み嫌われてしまうからだ。

ここまで考えて私はフッと声に出して笑った。何を考えてるんだ、私は、と。

私は“アラガミ”で、人間が忌み嫌う存在。

“ゴッドイーター”と呼ばれる人間にとって、捕食して滅するべき存在。

これも私たち“アラガミ”が世界で誕生してから生まれた自然の

摂理だ。その摂理に抗う事なんて、きっと“アラガミ”にも人間にも、“ゴッドイーター”にもできやしない。
ましてや私はもう何百もの人間を殺し、喰らい続けてきた。そんな私を、人間が許す筈がない。

……私は今、どんな存在なんだろう。
“アラガミ”なのに人間を理解している私は、一体何なんだろう。

出口のない迷路に迷い込んでしまったように、私の頭の中はずっと見つからない答えを探し続けている。ただひたすらに、自問を繰り返している。
その度に口から漏れるのは嘆息ばかりだった。

私は生まれた瞬間からただ空腹を満たすだけに獲物を喰らって生きてきた。いつ、どんな風に生まれてきたかは分からない。ただ気付けば肉を食っていた。きっとどんな“アラガミ”もそうなんだろう。“アラガミ”とは、きっとそういう存在なんだろう。きっと意味も理由もなく、ただ生きていたいだけなんだろう。
その“生きていたい”という意味や理由さえ見つける事ができたら、“アラガミ”も変わる事ができるのだろうか。生物の中で唯一感情が豊かで様々なコミュニケーション能力を持つ、最も特殊な人間を理解する事ができたら、変わる事ができるのだろうか。

私には分からない。

でも、私は人間を理解して変わってしまったんだと思う。

私にも感情が芽生えてしまったんだと思う。

人間と同じように――。

不意に私の瞼を明るく照らしていた陽の光が消えた。目を開けると私の頭上を覆いかぶさるようにして、私と同じような翼を持った“シユウ”と呼ばれる“アラガミ”が鋭い瞳で私を睨んでいた。

その瞳から殺気が感じられる。恐らく、私の弱ったような臭いを嗅ぎ付けたんだろう。“アラガミ”は雑食だ。人でも獣でも植物、果ては建物までも喰らう。当然、同じ“アラガミ”も――……。

私は慌てて体制を立て直そうとするんだけど既に攻撃体勢をとっていた“シユウ”の動きには敵わない。“シユウ”が手から放った火の玉は私の右翼に直撃し、私はバランスを崩して真っ逆さまに落ちていく。落ちていく私の目に映ったのは、当然の如く追い討ちをかけるべく私を追う“シユウ”の姿だった。

右翼は火の玉のせいでうまく動かすことができない。だけど左翼さえ動けば何とかバランスを取り戻し、そして反撃することができる。

落下していきながら私は左翼で空を仰ぎ体勢を立て直す。それと同時に左翼から紫色の毒粉を撒き散らした。毒粉を全身に浴びせられた“シユウ”は苦しそうにもがいている。その隙に私は毒粉を放ち続け“シユウ”の視界を奪い、そして身体を翻すようにして自分の落下を宙で止めると同時に同じく落下していく“シユウ”の巨体をかわした。

視界を奪われ地上との遠近感が掴めない“シユウ”。恐らく視界が晴れた時にはもう、地上との距離が近過ぎて止まる事ができないだろう。

私はゆっくりと左翼でバランスを保ちながら地上へと高度を下げていく。少しして、案の定ドスン、と地上で何かがぶつかるような大きな音がした。私は一先ず安堵し、更に高度を下げる。やがて私の撒き散らした毒粉が晴れると地上が見えてきた。地上はちょうど廃墟と化した街だった。数々の建物が存在する中、“シユウ”は運

の悪い事にどの建物に落ちる事もなく大地へと叩き付けられていた。

「あらら、かわいそうに。痛かったでしょ、“シユウ”ちゃん？」

嘲笑うかのように人間の言葉で地面に突っ伏したままの“シユウ”に話しかける。私の声に反応するかのように“シユウ”が起き上がり、建物の屋根に腰掛けた私を睨む。その瞳から怒りが読み取れた。

「……ねぇ、私の言葉、分かる？」

少し躊躇いながら“シユウ”に問い掛けてみる。だけど返ってきたのは言葉なんかの類じゃなく、案の定火の玉だった。私は瞬時に屋根から飛び降りると、地面に着地する寸前で翼を羽ばたかせて宙に浮かんだ。背後では轟音と共に建物が崩れ落ちていく。建物の欠片が地面に激突して生じた土埃に包まれながら、私は身体の奥から湧き上がってくる食欲を感じていた。この“シユウ”を食べたい、と。

そして、私は思う。

あぁ、やっぱりは私は“アラガミ”なんだ――と。

土埃が晴れるとほぼ同時だった。

私の視界に飛び込んできたのは両翼を羽ばたかせながら私に突進してくる“シユウ”の姿。もちろん私はそれを予測できなかった訳じゃなく、くるりと身体を回転させて自分を中心とした円状の光壁を発生させる。近付くモノを容赦なく弾き飛ばす、衝撃波のような壁。その光壁に阻まれるように“シユウ”は奇声を発しながら大き

く吹き飛ばされた。
“シユウ”の翼は私のそれと違って、人間のような腕に生えている。飛ぶ事などに特化した私の翼と、攻撃に特化した“シユウ”の翼。だから“シユウ”は光壁で吹き飛ばされても空中でうまくバランスをとることができずに再び地面に衝突した。
その隙を私は逃さない。“シユウ”が起き上がる僅かな間に左翼を何度も羽ばたかせて光球を宙に浮かべさせた。いくつもの光球が私を守るかのように私の前方を囲み、まだかまだかとうずうずして揺れている。……私の合図一つだけで、“シユウ”の身体は光球によって放射される光線によって貫かれるだろう。
起き上がった“シユウ”は私の周りに浮かぶいくつもの光球を見ても、何の表情も変えなかった。

……違う。普通の“アラガミ”は敵からの攻撃に恐怖などしないだろう。
それが、普通なんだ。私が、異端なんだ。

左翼をゆっくりと“シユウ”に向ける。アレが標的だ、と光球に教えるかのように。
その瞬間いくつもの光球から一斉に光線が放射され、“シユウ”は回避行動をとる間もなくそれらに身体を貫かれていく。砕け散る頭、翼、肉片――。
ゴクリ、と生唾を飲む。数日ぶりの食事を間近にしているせいか、私は自分自身が興奮しているのを感じていた。身体が食事を求めている。狂おしいほどに、“シユウ”の血肉を望んでいる。
最後の光線が“シユウ”を貫いた瞬間、私は“シユウ”が地面に倒れる前に行動を起こしていた。痛む右翼を気にも止めず、私は“シユウ”の元へ高速で飛んでいた。涎を垂らしながら口を大きく広げ、そのまま“シユウ”の首の辺りに噛り付く。
その瞬間だった。雷に打たれたかのように、ビビッと全身に電流

が流れたのは。

先日少女を捕食した時の映像が頭にフラッシュバックする。

少女の最期の苦しそうな嗚咽が何度も頭の中で繰り返す。

『痛いよ、痛いよぉ』という聞いてもいない少女のか細い声。

「あ……あぁぁぁあああああっ！！！」

私は“シユウ”の身体を突き飛ばすと、口内の齧ったばかりの血肉をペッと吐き出した。数日前から何も口にしていないのに身体の奥から次から次へとドロドロの紫色した血肉が溢れ出て、それも全て嘔吐する。

“シユウ”の血肉は、今までに味わった事がないくらいの酷い味だった。

さっきまで食事を欲しがっていた筈の私の身体が、“シユウ”を喰らう事を拒否しているようだった。

何故――自問自答するけど、答えなんて出る筈もなく、ただ私は致命傷を受けて地面でもがく“シユウ”を眺めていた。“アラガミ”は体内の“コア”と呼ばれる部位さえ捕食されなければ死に絶える事はなく、凄まじい速さで受けた傷を回復する。だからこの“シユウ”もこのまま放っておけばさっき放った光線の傷も回復し、何事もなかったかのように起き上がるだろう。

だけど私は、とどめを入れる事はできなかった。“コア”はおろか、血肉を喰らう事はできなかった。

私はただただ呆然と立ち尽くしている。

何度も何度も喰らおうとする私。それを全て拒否する私の身体。

やがて私はゆっくりと“シユウ”に背を向け、“歩き”出した。

両足でしっかりと地面を踏みしめながら、ゆっくりと、ゆっくりと。

ふと気付けば私の視界は何かで滲んでいた。それが何か理解するまで、さほど時間は掛からなかった。

私……泣いてる。

涙を……流してる。

それが何故だか分からない。だけど両目からは私の意志とは関係なく、ただただ涙が零れ落ちる。涙は頬を伝っては、ピチャ、ピチャと音を立てて地面や私のスカートの上に落ちて弾け散る。

人間のように大声を出して泣き喚きたかった。

自分でも理解できない事が悔しく、そして苦しかった。

でも……それはできなかった。

人間のように涙を流す“アラガミ”なんて、認めたくなかったから。

人間のように涙を流す“私”なんて、認めたくなかったから。

……私が今この世に存在する理由――“アラガミ”としての私を、失いたくなかったから。

2. 出会い

廃墟の中をどれくらい歩き回っただろう。普段から宙に浮いて移動していた私の足が悲鳴を上げるまでそう時間は掛からなかった。強く冷たい風が吹き荒れる中、私は適当な建物を見つけるとその中にゆっくりと足を踏み入れた。

足を踏み入れた瞬間、私は思わず立ち止まった。見た事のない景色が、そこにあった。

屋根が壊れて建物の奥に一部分だけ差し込む陽の光。それに少しでも近付かんがばかりに必死に大きくなろうとしている、色とりどりの花。陽の光を浴びながら活き活きとしていた。

小さなお花畑だった。一輪一輪、全ての花が今を一生懸命に生き、一生懸命に花を咲かせているように見える。全てが美しかった。全てが輝いていた。

私は再び歩み始め、お花畑に近付く。……間近で見るとより綺麗で、それでいて小さくて可愛らしい。

「あなた達は……こんなところにいて寂しくないの？」

私の小さな呟きがお花に届いたのかは分からない。ただ、風に吹かれて消えていっただけなのかもしれない。だけどその風に吹かれて揺れた花々が、コクリと頷いているように見えて仕方がなかった。

「そっか、寂しくないんだ……」

ゆっくりと足を折り曲げ、私はお花畑の前に座り込んだ。まだ痛む右翼で優しく、とても優しく花びらを撫でてみる。ふと、冷たい感覚があった。花びらが濡れているのだ。私は思わず屋根に開いた

大きな穴を見上げる。陽がさんさんと輝いていて、雨が降ったような痕跡は見当たらなかった。

あぁ、そうなんだ。
誰かに大切に育てられてるんだ。
いいね、あなた達は。私、あなた達が少し羨ましいかもしれない。

「私も……あなた達と同じように――」
「誰か、そこにいるのかい？」

不意に背後から声がして私はビクンと身体を震わせた。
考えれば当然の事だった。お花が水に濡れていたという事は、ほんの少し前まで誰かがここにいたという事。そしてその誰かがこの近辺にいる事を示していたのだ。
その誰かとはもちろん、人間だった。

「な……っ！！　“サリエル”！？」

私はゆっくりと身体を宙に浮かび上がらせると、ゆっくりとその人間の声のする方に向き直った。
……運が悪かった。“彼”はただの人間ではなく、腕輪と神機を持った“ゴッドイーター”――つまり、私達“アラガミ”の天敵と呼ぶべき人間だった。そして私も“彼”も、互いに面識があった。
“彼”は、私の第三の瞳を潰した張本人だった。
ガチャリ、と“彼”は銃口を迷うことなく私に向ける。私はどうすれば良いか迷っていた。普通の“アラガミ”ならば捕食されまいと攻撃体勢をとるのだろう。私自身も、以前まではそうだった。でも……今は、違った。
私はただじっと、手足も動かそうともせずに“彼”の目を見てい

た。澄んでいて綺麗な目をしている。とても正義感の強そうな少年に見えた。

「……お前、だけなのか？　さっき女の人の声が聞こえたけど……まさかっ！」

“彼”はハッとして私の足元やお花畑の方をはじめ、この建物のあちこちに視線をやると小首を傾げて私に視線を戻した。私が――“アラガミ”が人間の言葉を発するなんて、誰一人想像もしないだろう。だからこそ、“彼”は私が人間の女を喰らっていたと思ったんだろう。

でも、私の周りには人間の女がここにいたと思しき痕跡はない。当たり前だ。私と花々しか、ここにはいなかったのだから。

「お前が喋っていた……なんて事は、ないよな……？」

恐る恐る聞く“彼”だったが、私はそんな発想に至る“彼”に正直驚きを隠せなかった。だから思わず、『えっ！？』と人間の言葉を発してしまった。

案の定、“彼”もまた『えぇっ！！？』と声を上げる。

私は急に怖くなった。

私が喋れると知った人間が、この後どんな風な反応を見せるのか。

だから私は“彼”に背を向けて、屋根に開いた穴から逃げ出そうと――。

「待ってくれ！　お前が本当に俺の言葉が分かるんなら、ちょっと話をしよう！！」

“彼”の最後の一言が、私の身を“ホールド”させた。穴に差し掛かったところで上昇を止め、そのまま下にいる“彼”を見る。“彼”はもう、神機を私に向けてはいなかった。

「やっぱり俺の言葉が分かるんだ！　ハハッ、嬉しいな！　“アラガミ”とまた話せるようになるなんて！」

「……また？」

「俺、コータって言うんだ！　降りて来いよ！　そんな傷付いた身体で逃げても他の“アラガミ”や神機使いにやられるだけだ！　傷が癒えるまでだけでもいい、もう少しここにいてもいいんだぞ！！」

一目で私の身体の状態を見抜くとは、流石は“ゴッドイーター”だと思った。

“彼”の言う事はもっともだった。小型の“アラガミ”相手だと問題ないが、大型のそれや神機使いと遭遇してしまえばまず間違いなく捕食される。

……それに、“彼”の言葉が一番に気にかかる。“彼”は、以前にも“アラガミ”と言葉を交わした事があるのだろうか。人間の言葉を理解し、発する“アラガミ”が私以外にもいるのだろうか。

私は空中で暫く考えていたが、やがて恐る恐る高度を降ろし、お花畑の傍へと足を下ろした。

「お前、あの時の“サリエル”だよな？」

恐る恐る私に近づきながら、コウタと名乗った人間が口を開く。銃口こそ私に向けてはいないが、両手にはしっかりと神機が抱えられていた。それが私から攻撃を受けた際に反撃をするためなのか、それとも私が隙を見せた瞬間に私を撃ち抜くつもりなのか、私には

分からない。だけど私は不思議とコウタに不信感を抱く事はなかった。少年らしい無垢な瞳で見つめられては、私の思考がおかしくなる一方だ。
やがてコウタは私を一瞥した後、すぐ傍のお花畑に目をやり、しゃがみ込む。

「綺麗だろ？　俺もさ、こいつらを最初に見つけた時はビビったよ。こんなところで一生懸命、誰にも知られずに生きているなんてさ」

私が口を挟む間でもなく、コウタは続ける。

「俺は……分かってると思うけど、“ゴッドイーター”なんだ。ここに来たのも偵察任務で、あの街で見かけたお前を探してる途中だった。発見次第、俺は“アナグラ”に戻って報告するように言われてる」

“アナグラ”……多分、“ゴッドイーター”が属する組織か建物の事だろう。つまり、コウタが私を見つけた事を伝えれば、大勢の“ゴッドイーター”が私を喰らいに来るという訳、か。私を脅しているのだろうか、それとも……？
コウタは立ち上がると、再び私へと向き直った。

「な、お前は俺の言葉が分かるんだろ？　喋れるんだろ？」
「……うん」

恐る恐る私はゆっくりと首を縦に振り、改めてコウタの言葉を肯定する。その瞬間、笑顔と同時に少し複雑そうな顔をした。
当たり前だ、例え私が異端な存在であっても、“アラガミ”と仲良く話すなんて“ゴッドイーター”のする事ではないのだろう。そして私は先日コウタの目の前で人間を喰らうところを見られている。

コウタの中で葛藤があるんだろう。“アラガミ”と話ができる事を喜ぶべきものなのか、自分の立場はどうなるのか。そして、倒さなくてもいいのだろうか、と。

「そ……っか！　んじゃまずは自己紹介からだ。改めて、俺はコウタっていうんだ。お前は？」

私の、名前？
そんなもの、考えたこともなかった。
そんなもの、必要だと思ったこともなかった。

「名前なんて、ない。好きに呼んでくれたらいい」
「やっぱりそうか……そりゃそうだろなぁ～」

ガクッ、とコウタが全身で“がっかり”を表現する。その仕草が可笑しくて、そして可愛くて、私の口元は勝手に微笑んだ。

「う～ん、前に“シオ”に付けようとした名前は皆にセンス悪いって言われたし……名前、名前……」

頭をぼりぼりと掻きながらぶつぶつと小さな声で呟くコウタ。私の名前なんてどうでもいいのに、それでも一生懸命考えてくれてるみたいだ。私なんかのために誰かが何かをしてくれる――初めての経験だった。胸が小さく、キュン、と締め付けられる感覚。苦しい訳じゃないけど、これも初めての経験。
やがてコウタがパッと私の顔を見る。満面の笑顔だ。

「決めたっ！　お前の名前は“アゲハ”だ！　へへっ、いい名前だろ？」

アゲハ？
……うん、アゲハ。いい響きだ。
「うん、アゲハ……気に入った」
私はコウタに向かって笑顔で返した。
コウタは色々な話をしてくれた。
“バガラリー”のこと、家族のこと、仲間のこと、そして“シオ”という少女のこと――。
「……俺達が今こうしていられるのも、全部シオのおかげなんだ。シオがいなければ、俺もアゲハもこんな風に話すことなんてできなかった」
“シオ”――“アラガミ”の少女。私と違って、完全に人の姿で初めから人の言葉を話していたという少女。コウタの口から話される“エイジス計画”“アーク計画”をはじめとするほとんどの単語は、当然の如く私には聞き覚えがなかった。
人間って、コウタってそんな風に生きているんだ。家族のために、仲間とともに私達“アラガミ”と戦っている。聞けば聞くほど私は人間に対する興味が沸いてきた。もっと人間のことが知りたくなってきた。
でも、私なんかが人間のことを知って、どうするんだろう。
「なぁ」
一緒にお花畑を眺めていたコウタが不意に私に顔を向ける。

「今後はアゲハのことを聞かせてくれよ」
「え……？」
私は困惑した。私が話せることと言えば“アラガミ”として人間を喰らっていた頃のことぐらいだから。そんなことを聞かされたって、人間であるコウタが喜ぶはずがない。
私が何も言えずにいると、コウタはバツが悪そうにまたお花畑に視線を戻す。
「ごめん……俺さ、悪いこと聞いたよな？」
「別に悪くなんて、ない。ただ私が話せることなんて、少ないから……」
それっきり、私達は喋らなくなった。ただただ静寂がこの場を支配し、時折どこからか流れてくる風が花々を揺らすだけ。……別にコウタが悪いだけじゃないのに、空気が重かった。
だから、思い切って私が口を開こうとした――その瞬間だ。
クゥゥゥゥゥ。
……私の口よりも、私のお腹の虫の方が早かった。
「腹、減ってんのか？」
その音はやはりコウタにも届いていたみたいで、彼は口元を緩めながら私を見る。
とてつもなく恥ずかしかった。“アラガミ”の私も、人間と同じように今赤面しているのだろうか。ただ、頬の辺りが熱くなっているのを感じていた。

「そっか、んじゃ俺が“サイゴード”でも――」
「やめて！！」

コウタの言葉を遮って、私は大声を出していた。コウタはそれに少しびっくりしたみたいで、目を丸くしていた。

「ごめんな、俺また変なこと言っちゃったよな」
「……ううん、全然変なんかじゃないよ。でも、私の身体は――……」

私はコウタに全てを打ち明けることにした。
あの時、人間の少女を喰らったこと。それから私の中で何かが変わったこと、数日前から何も食べていないこと、“シユウ”を捕らえても喰らうことができなかったこと。

全てを聞いたコウタは、どんな顔をするんだろう。

何を、思うんだろう。

少しだけ……怖かった。

人の心を持った“アラガミ。“アゲハ”という名の“サリエル”……それが私。
“アラガミ”は何かを捕食する度にその捕食した相手の特性を吸収し、進化する。だからお前は人間を喰らい続けることによって、人間のように進化してしまったんじゃないのか――とコウタは言った。私の話を聞いても、コウタはさっきと変わらずに私に接してくれた。
でも、どうして私だけが？　他の“アラガミ”も人間を捕食し続けているはずなのに、どうして？

「とにかく博士ならきっとアゲハの味方になってくれるよ。もちろん俺の仲間達だってそうさ！」

本当にそうなの？

私、人間と一緒にいても、いいの？

「怖がることなんてない、皆きっと分かってくれるさ。アゲハ、お前という存在をさ」

立ち上がったコウタが私にそっと手を差し伸べる。優しく笑みを浮かべ、『心配ないよ』と黙って頷いてくれた。

でも私はすぐにはコウタの手に自分の翼を差し出すことはできなかった。恐怖と不安が私の身体を縛っている。コウタが嘘を言うような人間には思えなかったけど、それでも私は、“アラガミ”が人間と一緒にいることが許されることとは思っていなかった。

“喰らうモノ”と“喰らわれるモノ”。その摂理に抗うのは許されることなの？

私は怖かった。“アナグラ”という場所で再び人間を喰らいたいという欲望に駆られてしまうのではないかと。優しくしてくれたコウタを喰らってしまうのではないかと。

そして、私がコウタに喰われてしまうのではないか、と。

私は“シオ”なんかじゃない。人間の身体なんて持っていない。ただの、人の心を持った化け物なんだ。

「ほら、アゲハ！」

コウタはずっと私に手を差し伸べ続けている。私はその手にゆっくりと翼を差し出そうとするけど、やっぱり怖くて引っ込めてしまう。
やがてコウタは小さく溜息を吐くと、手を引っ込めて私の隣に再び座り込んだ。
「……アゲハの決心がつくまで、俺もここにいるよ」
優しく、小さくコウタが呟く。暫くした後、今度こそ私から口を開いた。
「どうして――……」
「ん？」
「どうして、コウタは私に優しくしてくれるの？」
ずっと気になっていたこと。普通の人間や“ゴッドイーター”なら、私から逃げるか、私を襲うかのどちらかでしかないと思っていた。例え私が人間の言葉を発しようとも、『気持ちが悪い』と思われるだけだと思っていた。
やっぱり、その“シオ”って“アラガミ”と関係あるの？
「……“シオ”と俺達人間、“ゴッドイーター”が心を通わせることができたからさ」
コウタが静かに続ける。
「ずっと“アラガミ”は敵だ、倒すべき敵なんだ――そう思っていた。でも“シオ”に出会ってから、俺はいつか“アラガミ”と人間が共存できる日が来るんじゃないかって、思うようになったんだ。“アラガミ”が皆、“シオ”みたいになってくれたら――人の心を

持つようになってくれたら――この世界は、平和になるんじゃないかって。だからさ、アゲハが人の心を持っているって知った時、俺はホントに嬉しかったんだよ」

私みたいなのがいて、嬉しい？

「“シオ”もアゲハも、人類や“アラガミ”にとっての新たな可能性――そう、希望だと思うんだ。でも俺……俺達は“シオ”を助けることができなかった。“シオ”が攫われた時、俺は戦いから目を背け、逃げていたんだ。“シオ”を守ってやれなかった、助けてやれなかった。だからさ、俺は今度こそ守り抜きたいんだ！アゲハ、お前をさ」

嬉しいのか、悲しいのか。
苦しいのか、辛いのか。

分からなかったけど、ただ、私の目からまた涙が零れた。

3．決意

コウタが私の涙を拭おうと手を伸ばした丁度その時だった。何かの気配がして、私とコウタはほぼ同時に建物の入り口へと視線をやり、立ち上がる。――……一つの足音だ。

コウタは私に下がるように手で合図を送ると、神機を担いで建物の入り口付近に張り付き、そっと外の様子を眺める。足音がどんどん近付いてくる。突然、足音が二つになった。一つは小さく、そして新しいもう一つの方は大きな足音だ。

私の脳裏にあの時の“シユウ”がよぎる。あぁ、そうだ。あの時の“シユウ”が誰かを追っているんだ。

「コウタ――」

「くそっ！　こっからじゃ分かんねぇ！　アゲハ、少しの間そこでじっとしててくれっ！！」

言うや否や、コウタは私の声など聞こえないかのように建物を飛び出していた。

“アラガミ”の細胞は破壊され、再生する度に強固なものになっていく。だからもしあの大きな足音が私が倒した“シユウ”だったとしたら、コウタ一人じゃ危ないかもしれない。

もしかしたら必要ないのかも知れない。必要ないかもしれないけど――。

私もすぐにコウタの後を追って、建物を飛び出した。

人間の走る速度と私の飛行速度じゃ明らかに私の方が早かった。

だから、私とコウタが“彼女達”を見つけたのは同時だった。

「アリサ！？　お前、どうしてここに――」

「話は後にしてください！　ってコウタ！　あなたの後ろ！！」

私達が見たのは、やはりあの“シユウ”とそれに追いかけられているコウタと同じ神機を持った少女だった。その少女の言葉にコウタはようやく後ろの私に気付き、声を上げる。

「アゲハっ！？　待ってろって言ったろ！！」

「ごめん。でも、放っておけなくて……」

このままでは埒が明かないと判断したのか、アリサと呼ばれた少女は走っている進行方向へ地面を蹴って前転し、そしてそのまま向かってくる“シユウ”に向かって神機を向ける。そして迷いもなくトリガーを引いた。

銃口から飛び出した私の放つそれと同じような光線は一直線に“シユウ”の頭部に直撃する。だが、光線は頭部を貫通することもなければ吹き飛ばすこともなかった。ただ、硬い装甲のような皮膚に阻まれ、弾かれていた。

「嘘っ！？」

アリサが驚きの声を上げる間に“シユウ”と彼女の距離が一気に縮まり、そして“シユウ”はその腕を振り上げ、彼女に向かって一気に振り下ろした。

その瞬間、私は『助からない』と思った。だけどアリサの反応は私の予想していたよりもずっと早く、“シユウ”の攻撃よりも早く地面を蹴ってそれを避けると間髪入れずにトリガーを何度も“シユウ”に向けて絞るけど、どの光線もさっきと同じように弾かれ、恐らく傷一つ付けられてはいないだろう。

勢い余って地面に爪を突き立てた“シユウ”がゆっくりとその爪を引き抜き、アリサへと向き直る。

「ちぃっ！」

その瞬間、コウタが“シユウ”に向かって一直線に走り出し、勢いをそのままに跳躍して“シユウ”に向けた銃口から弾丸を放つ。光線ではなく、大き目の弾丸だ。でもそれも“シユウ”の頭部に直撃はするが、効果は皆無のようだ。

コウタは地面に着地すると同時に懐から何かを取り出して地面に投げつける。その瞬間、辺り一面が眩しい光に広がる――。

一瞬にして私の視界も奪われて何も分からない。ただ、聞こえるのはコウタとアリサの声だけ。

「――ったくもう！　“スタングレネード”使うなら使うって言ってくださいよ！」

「悪い！」

「そんなことよりコウタ！　あなたの後ろにいた、あの“サリエル”は――」

「……アゲハは、“シオ”と同じなんだ」

「え？」

「“シオ”と同じなんだ！　人間の心を持った“アラガミ”なんだよ！！　だから、敵じゃないんだっ！！」

「突然そんなこと言われても……」

「とにかく敵じゃない！　詳しい話は後、だろ！？」

「分かりましたよもう！」

二人の会話が終わった頃、“スタングレネード”の眩しい光に包まれた私の視界が徐々に回復していく。目に映ったのはいつの間にか“シユウ”と距離をとった二人の姿で、二人とも神機を“シユウ”に向けていた。同時に“シユウ”も視力が回復したらしく、『グオォォォォ』と叫び声を上げながら二人を睨んだ。

そして、“シユウ”が何かに気付いた。
そう、少し離れた場所にいる、私という存在に。
私と“シユウ”の目が合う。
その瞬間から、“シユウ”の標的は私に変わったんだろう。
“シユウ”は跳躍すると、そのまま翼を広げて私に向かって勢いよく飛んでくる。
「――アゲハ、逃げろぉぉぉっ！！！」
コウタの声が聞こえる。だけど私は、逃げようとはしなかった。
私が中途半端に“シユウ”を攻撃していたせいでコウタ達を窮地に追い込んでしまうのなら――。
私が、“シユウ”を倒す。
私が想像していたよりも、“シユウ”の身体も知能も私が戦った時より遥かに向上していた。直感、反射神経、間合いの読み方――それらはまるで人間の“ゴッドイーター”であるかのようだった。
私に向かって一直線に飛んで突進してくる“シユウ”。私は前回と同じように私の周りに光壁を発生させてそれを弾き返そうとしたんだけど、“シユウ”は私の予想外の行動をとって見せた。……私との距離がある程度縮まったところで、“シユウ”は地面に着地したのだ。勢いのあった“シユウ”の身体が両足をブレーキにして土埃を上げながら地面を滑る。そして“シユウ”の身体が止まったのは、私の光壁の届かない範囲だった。

「なっ！！　“シユウ”のヤツ、何て動きをしやがるっ！！」

後方で銃口を“シユウ”に向けようとしていたコウタが驚いた声を上げる。驚いたのは私も同じだった。私はすぐに光壁を止めて回避行動に移ろうとするんだけど、やっぱり“シユウ”の動きの方が早かった。

両手に生じさせた大きな火の玉。それを迷うことなく私に向かって放つ“シユウ”。強烈な熱気が私に近付いてくる。私は光壁で弾き返せないかと咄嗟に光壁の効力を高めたけど――……だめだった。

「きゃああっ！！？」

悲鳴を上げながら、私は自分のスカートの部分の細胞が破壊されるのと同時に後ろへと吹き飛ばされる。“シユウ”の火の玉は私の光壁をもろともせず、私のスカート部に直撃したのだ。

“シユウ”を瀕死状態にしてから、時間が経過し過ぎていたのだ。だから“シユウ”は万全の状態であり、そして全ての細胞が著しく活性化している。以前の“シユウ”とは比べ物にならないくらい強い――私はそう感じていた。

後方に吹き飛ばされた私は地面に叩き付けられる前に翼を羽ばたかせてバランスを取り直し、何とか宙に浮かび続けることに成功する。私は“シユウ”が次の攻撃に移る前に左翼で頭に触れ、そして右翼の状態を確認した。

……案の定、頭の第三の瞳はコウタに破壊されたまま再生されておらず、右翼も“シユウ”の火の玉で攻撃されたきりの状態だった。

人の心を持っただけじゃなく、身体の細胞も人間と同じようになってしまったの？

その疑問は自らの身体が証明していた。私の身体は、“アラガミ”特性のオラクル細胞による再生力が失われていた。

――こんな状態じゃ、コウタの力にもなれない。……ただの足手まといにしかならないっ！！

悔しかったけど、それが事実のようだった。

「アゲハ！　もういい、下がっててくれっ！　この“シユウ”は俺達が相手をする！」

駆け付けて来たコウタとアリサが同時に神機からの弾丸を“シユウ”に浴びせる。どうやら弾丸を入れ替えたようで、二人の神機から飛び出た弾丸は“シユウ”に命中すると刹那の時間差で爆発を生じさせる。それぞれが小さな爆発ではなかったが、“シユウ”はその数多の爆撃の衝撃にさすがに応えのか、ガクンと片膝を地面につけた。

それを好機と見たアリサが神機を“銃形態”から“剣形態”に変化させ、一気に間合いを詰める。そして高々と跳躍すると“シユウ”の脳天目掛け、力一杯振り下ろす――。

が、それも甲高い音を立てて弾かれた。その隙を“シユウ”を見逃さない。

アリサの攻撃が弾かれた瞬間、“シユウ”が片膝をついたまま彼女に向かって爪を突き立てる。空中にいたアリサは当然回避行動を取ることができず、“シュウ”の攻撃が直撃する。が、そこは流石“ゴッドイーター”だ。弾かれたばかりの剣を咄嗟に自分の胸元に引き寄せ、その柄で“シユウ”の爪を受け止める。その衝撃で吹き飛ばされるが空中で器用に身体を一回転させて地面に着地した。

「くっ、なんて硬い……っ！」

悔しそうにアリサが唇を噛む。

「アリサっ！　サクヤさんとソーマは！？」

“シユウ”に向かってトリガーを引き続けながらコウタが叫ぶ。

「私と一緒に来たからすぐ近くにいるはずです！」

「なら二人で何とかもう少しもたせるぞ！　この喧騒に気付いてすぐに駆け付けてくれるはずだから！」

「分かりました！」

……私は、見ていることしか、できないの？

“シユウ”に全力で攻撃を仕掛ける二人を見ながら、私は唇を噛む。第三の瞳が使えない以上、攻撃できる“技”が極端に少ないから毒粉を撒き散らしたり光球から光線を放ったりすることしかできない。そのどちらも、コウタとアリサがいるから不用意に放つことはできない。仮に放ったとしても、“シユウ”にダメージを与えられるかは別問題であり、そしてダメージを与えられるとは思わなかった。

何かできないかと色々と考えては見るけど、結局良い案は浮かんでこない。

ただ、私は歯痒かった。

“シユウ”の視線は常に私に向けられていた。アリサの剣を弾き返しても、コウタに弾丸を浴びせられ続けても、怒りに満ちた目で私を睨み付けている。

第一の標的にされていてもなお、逃げずにこの戦いを傍観している私。“シユウ”の目には私が二人の“ゴッドイーター”を指揮しているように見えるのかもしれない。その指揮官さえ倒せば――と“シユウ”は思っているかもしれないけど、きっと私を標的とする理由はもっと単純だ。

私が、“シユウ”を甚振った張本人だから。そう、怒りにも見えるその瞳に燃えるのは、一種の復讐の炎。『借りはきっちり返してやる』と目が訴えている気がした。

突然、“シユウ”が動きに出る。

二人の攻撃に少々怯みを見せていた“シユウ”だったが、ゆっくりと両足を深く曲げるとそのまま勢いよく地面を蹴って高く舞い上がった。また私に突進してくるつもりかと思わず身構えるけど、それは違った。舞い上がった“シユウ”はそのまま地上へ向き、それぞれの手に火の玉を生じさせる。身体の上昇が止まる頃、“シユウ”は地上の二人に向かって火の玉を繰り出した。

空気を焦がすような轟音を立てながら二つの火の玉はそれぞれコウタとアリサを焼き尽くすべく落下していく。当然、それを安易に当たるような二人ではなかった。落下地点をすぐに見定め、二人はスッとその場所から離れる。火の玉が何もない地面落下するとほぼ同時にコウタは上空から落ちてくる“シユウ”に照準を合わせるべく、銃口を空へと向けた――その時だ。

「――いぃっ！！？」

空を見上げたコウタとアリサが見たのは、自分達に目掛けて落下してくる無数の火の玉だった。“シユウ”は一旦火の玉を二つ繰り出した後、連続して火の玉を放ったのだ。しかしそれぞれは連続して放たれているのにも関わらず、最初の二つと同様巨大なものだった。

いくら“ゴッドイーター”と言えど、これら全ての火の玉を回避することは不可能に等しいだろう。これだけの数の火の玉の全ての落下位置を推測して行動するなんてできるわけがない。一つ目を避けたところで二つ目の業火に焼かれてしまう！

だから私は、動いた。

今の私にできるのは、これくらいしかないから。

私は勢いをつけて二人に向かって飛んだ。風を読み、翼を器用に動かしながら速度を高める。落下してくる火の玉には目もくれず、ただ私は二人の姿を映していた。

「アゲハっ！？」

「きゃん！！」

右翼にコウタ、左翼にアリサをできるだけ優しく抱き上げ、私はそのまま一直線に飛ぶ。後ろでは火の玉が次々と地面に激突する轟音が響き渡る。何度も、何度も――。

間に合った、と私は安堵し、少し長い息を吐く。

「サンキュ、アゲハ！　助かった！！」

「……その、あ、ありがとう……ございます……」

翼の中の二人が私に礼を言う。私を守るために戦ってくれていたんだから、礼を言うのは私の方だ。

でも、何だか照れくさかった。頬の辺りがまた熱くなっているのを感じる。

その瞬間、私は“シユウ”を甘く見ていたことを思い知った。

背後から近付いてくる高熱に気付いた時には、時既に遅かった。

「――きゃうっ！！？」

背中に大きな衝撃と激痛が走る。同時に何かが焦げるような嫌な臭いがした。

私はそれでもコウタとアリサを落としたりしないよう歯を食い縛る。でも、衝撃でバランスを崩した私の身体は勢いをそのままに地面に激突するしかなかった。

ズザザザと私の身体が地面を削り、やがて建物に衝突してようやく私の身体は止まった。激痛が私の身体を支配する。でも、痛みに悶絶しているような暇は“シユウ”は与えてくれないだろう。私は身体に鞭を打つようにしてコウタとアリサを地面に降ろすと、すぐに後ろを振り返った。

案の定、“シユウ”が私目掛けて一直線に飛んできていた。

「アゲハっ、お前……ボロボロじゃないか！！　頼む！　もう下がって休んでくれ！！　あんなヤツ、俺が本気を出してちょちょいとぶったおしてきてやるからっ！！！」

コウタが必死の形相で訴えるけど、あの“シユウ”の異常なまでの硬さと打たれづよさに苦戦を強いられるのは明白だった。……私には分かる。コウタはもう分かってるんだ。コウタとアリサだけじゃ、あの“シユウ”は倒せない、と。

アリサは何も言わなかった。でも、目は絶対に諦めないと語り、神機を力強く握り直す。

でも、やっぱり。

この“シユウ”を生み出してしまったのは私だから、私が何とか

しないと。
せめて“サクヤ”と“ソーマ”とやらが到着するまでは――……っ！
私は、“シユウ”に向かって真っ向から飛び掛った。
「アゲハぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
後ろから聞こえるコウタの叫び声は、心なしか震えていた。
きっと私に死んで欲しくない、と思ってくれているんだろう。それだけでも、私は嬉しかった。心の底から嬉しかった。だからこそ、私はコウタの力になりたいんだ。
ただ守られるだけなんて、絶対に嫌だ！
私だって、コウタを守りたいっ！！
人間を――……守りたいんだっ！！！
今の私のこの気持ちに嘘はない。そして、この気持ちは絶対に忘れたくない。
ちょっとだけ、不安だった。
“こう”すること、“こう”思うことを。
でもきっと大丈夫だ。
コウタがいてくれるなら、私はきっと私でいられる。

そう、きっと――……。

私は両翼を広げて“シユウ”の突進を受け止めようとする。だけど当然勢いのあった“シユウ”の力には敵わない。もとより、私には肉体的な強さはなく、せいぜい身体の硬さくらいしか強いところはなかった。

“シユウ”の力に負けて、私は“シユウ”に押されるような形で吹き飛び、コウタとアリサの間を通り過ぎてさっきの建物に背中から衝突した。めきめきと私の身体と建物が悲鳴を上げる。声にならない悲鳴が勝手に口から零れ出る。

両翼を必死に動かし、何とか“シユウ”の腕を私の身体から引き離す。そして私はそのまま“シユウ”に抱きつくような形で両腕を完全に塞ぐことに成功した。腕を使えなくなった“シユウ”は途端に私のお腹を膝で何度も何度も蹴り上げてきた。その度にバラバラと音を立てて私の身体の破片が地面に落ちては転がっていく。

私はもう、原型を留めていないのかも知れない。

コウタとアリサが何かを叫んでも、私には何を言っているのかは分からない。

もしかしたら『私が邪魔で“シユウ”を攻撃できない』なんて言っているのかも。

だとしたら……ごめん、ね。

私はお腹に何度も膝蹴りを浴びせながらも、大きく口を開く。

そしてそのまま、不味そうな“シユウ”の首筋に“再び”噛み付いた。

目を覚まして！
私の中の“アラガミ”の血よ、肉よ、力よ！
今一度、今のこの一瞬だけ――私はまた、“アラガミ”に戻る！

4．目覚め

硬い“シユウ”の首筋をやっとのことで噛み千切った私は、それを口に含んだ瞬間に強烈な嘔吐感が身体の奥底から込み上げて来た。脳裏にフラッシュバックする映像は、やっぱり私が最後に喰らった少女だった。私の目からは何故かとめどなく大粒の涙が零れ落ちて頬を伝う。視界が滲んで何も見えなくなっても、私は件名に口の中の血肉を噛み砕いていく。やがて一気に飲み込むと同時に、身体が拒絶反応を起こしたかのように飲み込んだばかりの血肉がまた口から飛び出そうとする。それを塞ぐように、私はそのまま“シユウ”の首筋に口を埋めた。

首筋から溢れ出て来る“シユウ”の紫色の血液。私は血肉を吐き出すまいとばかりに一気に血液を身体へと流し込んでいく。

不味い。“シユウ”の全てが不味かった。今まで“アラガミ”を捕食してきて、こんなに不味いと思ったことはない。が、今まで“アラガミ”を捕食して美味しいと思ったこともなかった。

そう、美味しかったのは、人間の血肉。

思い出すんだ、アゲハ。人間ばかり喰らっていたあの頃を――。

不意に強烈な膝蹴りがお腹に直撃し、私はついに“シユウ”から引き剥がされてしまった。ボロボロの身体はもううまく動くことができず、私の身体はそのまま背中から地面に倒れ込む。それでも、私は両翼で口元を押さえて捕食したばかりの血肉を吐き出さないようにした。

とても苦しくて、とても気持ち悪くて、とても辛くて。それを吐き出してしまえば色々な意味で楽になれるだろう。だけど私は絶対に吐き出すことはしなかった。少なくとも身体がその血肉を吸収してしまうまで。

「このぉぉぉぉぉっ！！！」

私が地面に倒れたのとほぼ同時にコウタとアリサが“シユウ”への攻撃を再開する。狙いは当然私が穴を開けたばかりの首筋だが、“シユウ”は攻撃させまいとばかりに左腕で首筋を庇いながら反撃にと火の玉を繰り出していく――。

私が目で確認できたのはそこまでだった。もう立ち上がる気力もなければ“シユウ”の方へ視線を移すこともできなかった。

ただ私は、青く広がる空を眺めていた。けど、その視界もどんどんと霞んでいく。

もう、手遅れだったの？

私はもう、“アラガミ”には戻れないの？

何もない暗闇が私の意識を飲み込んでいく。

私は一体、何だったんだろう。

中途半端に人間の心を持ち、そして人間を理解し……。

あの頃のまま、“アラガミ”としてずっと生きられたらどんなに楽だっただろうか。

……でも、人間の心を持ったからこそ、今の私がある。

身体を張って誰かを守ろうとした、今の私がある。

誰かを守る――それってきっと、素敵なことなんだと思う。

“アラガミ”にはきっと真似のできない、ホントに素敵なことなんだと思う。

ごめんね、コウタ。

私、もっとあなたと一緒にいたかったな。

アリサ、あなたともちゃんと話をしたかったな。

サクヤ、ソーマにも会ってみたかったな。

“アナグラ”ってところに行ってみたかったな。

“バガラリー”、一緒に見たかったな。

……私の両翼が力を無くして口元から離れ、自然と地面に崩れ落ちる。

でも私の口からはもう、“シユウ”の血肉が吐き出されることはなかった。

視界が闇に包まれてすぐの出来事だった。

――ドクン。

全身が大きく鼓動する。同時に身体の奥底から力が沸いて来るような感覚。

――ドクン、ドクン、ドクン。

全身の傷口が塞がり、細胞が活性化してどんどん再生されていく感覚。

――ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン。

私の身体が再び、“アラガミ”化していく……。

『……ようやく、私を望んでくれたか』

……誰？

頭の中で直接誰かの声がする。聞いたこともない声だった。美しい女の人の声。でもそれでいて低く、冷たい声だった。

『あの男の力になりたいのだろう？』

突然の出来事に戸惑いながらも、私はその問いかけに小さく肯定する。

その瞬間、全身が今までにないくらいに大きく鼓動を始める。ビクン、ビクンと身体が飛び跳ねているのが分かった。同時に全身の細胞が急激な速さで破壊と再生を繰り返していく。

「……っ！！！！！」

この苦しみはもはや言葉にできなかった。今までに味わったこと

のない苦しみ。全身の細胞が悲鳴を上げている。それこそ破壊の速さに再生が追いつかなくなり、そのまま身体が消炭にでもなってしまうのではないかと思うくらいだ。

『お前の望み、叶えてやろう。さぁ、私の力を使いあの“シユウ”を圧倒してみせよ！そして人間を救ってみせろ！』

声が消えた瞬間、私の身体は宙へと飛び上がった。

宙に飛び上がった頃には全身の細胞の破壊と再生も終わっていて、私は自身から溢れ出てくる力に驚きを隠せないでいた。そして気付く。私の翼が……全身が紫色と緑色に変色していることに。私は直感で『進化したんだ』と思った。死の淵に立ち、新鮮な血肉を喰らったことによって私の細胞が変化したんだ。あの声はなんだったんだろう……でも今は悠長に考えている暇はない！

地面から少し浮いたところまで高度を下げると、私はようやく目を開いて状況を確認する。途端、“シユウ”に向けて弾丸を発射し続けているコウタと目があった。

「アゲハっ！！」

コウタの目に涙が滲むのが見えた。でも彼はぐいっと手の甲でそれをすり潰すと、何もなかったかのように“シユウ”に向き直った。私の見た目が変わっても、それでも変わらずに私のことを迷わず“アゲハ”と呼んでくれる……涙が出るほどに、嬉しかった。

私はそっと翼で頭を撫でる。……やっぱり傷は完全に癒えていた。

「コウタ、アリサ。下がって。あとは、私に任せて」

呟き、私は再び空に向かって飛び上がると、そのまま“シユウ”と彼らの間に割って入る形で降り立った。後ろの二人に視線を送ることもせず、私は“シユウ”の姿を改めて確認する。やはり、大したダメージは受けていないみたいだ。

「アゲハ、ヤツを倒すのは俺達の――」

「はっきり言って、あなた達二人だけじゃ足止めが精一杯。だから、私が倒す」

「でも、アゲ……ハ、あなたに何が起こったのかさっぱり分からないけど、あなただけに任せる訳には……っ！」

アリサが初めて私の名を呼んでくれた。そこでようやく私は二人へと振り返り、笑顔を作ってみせる。二人は笑顔を見せてはくれなかった。不安に満ちた目で、ただ私を見ている。どことなく恐怖しているようにも見えるのは、私の気のせいだろうか。

「大丈夫。もう、絶対に心配なんてさせないから。最後のとどめは……お願い」

それだけを言い残し、私は悠長に手の指を器用に動かして私を挑発している“シユウ”に向かって全速力で飛行した。途端、“シユウ”も反撃に転じるべく両腕を左腰のあたりに移動させ、火の玉を作り始める。

お互いの距離はさほど離れていなかった。それでも私が“シユウ”へ接近したときにはもう巨大な火の玉は私を焼き尽くすべく放たれていた。

感じたことのある高熱が私の眼前に迫る。でも、今の私なら……怖くない。私はその火の玉に頭から突っ込んでいった。直撃に高熱

と衝撃に私の脳天が激しく揺す振られる。
……案の定だ。私の硬度が格段に上がっている。火の玉なんかじゃ私の身体はビクともしない！　私の身体はそのまま勢いを落とすことはなく、私は頭から“シユウ”に突進した。さすがに予想外だったのか“シユウ”は全く動くこともできず、私の突進をまともに喰らって後ろに大きく吹き飛んだ。

私は、笑っていた。

「コウタ、見ましたよね！　“サリエル”が急に“堕天”に――……っ！！」
「……ああ、そうだな」
「おかしいですよ！　絶対あの“アラガミ”はおかしいです！　人の言葉を話して……それで今度はいきなり“堕天”に進化するなんて！！」
「……」
「あの“シユウ”が片付いたらきっと次は私た――」
「黙れよっ！！！」
「っ！？」
「……お前が不安に駆られる気持ちは分かる！　けどな、俺はアゲハを信じる！！　アイツがどんな姿になろうとも、どんだけ強大な力を得ようとも！！　アイツはもう、人間を襲ったりしないんだって！！　俺達と同じ時間を過ごせる、友達なんだって！！」

「俺は……信じてる。そう、信じてるんだ……っ！」

私の突進を受けて大きく吹き飛んだ“シユウ”は突然の出来事に何の反応もできずそのまま地面に激突する。私は追い討ちをかけるべく高速で“シユウ”の真上に移動すると、身体をくるくると回転させながら翼を動かし、いくつもの光球を生み出した。同時に毒の粉塵を撒き散らすと、私は一旦“シユウ”から離れる。

濃い紫色の粉塵が“シユウ”を大きく包み込み、私の目には光球はおろか“シユウ”の姿すら映らない。ただ、粉塵が妖しく宙に舞っているだけだった。

くいっ、と私は粉塵の方へ差し出した右翼を動かす。光球に合図を送り、そして光球からは光線が“シユウ”へと放たれる。文字通り、降り注ぐ雨のように――。

やがて風が吹き、宙に舞っていた粉塵を晴らしていく。そして風とともに姿を現した“シユウ”の身体は、光線の雨を直撃したことを物語っていた。頭、胸、翼、足……あちこちの細胞が破壊されている。それでも立ち上がって私を睨んでいるのが、『まだまだ戦える』と訴えているようで可笑しかった。

そう、可笑しい。

諦めない“シユウ”も。そして、“シユウ”を甚振ることを楽しんでいる私も。

……楽しい。

とても楽しい。

楽しくて楽しくて仕方がない。
“獲物”を喰らうべく戦い、攻撃をしていることが。
その攻撃で見る影もなくしていく“獲物”の身体を見ることが。
自らの力で“獲物”を圧倒することが。

うふふふ……あはははははっ！

もう甚振るような攻撃をするのも面倒だ。
さて……さっさと“シユウ”を喰らって、それから後ろの“アイツら”を――……っ！？

待って！　一体何を考えてるの、私は！！
“シユウ”を喰らって、それからコウタ達を喰らう？
これが私の願望？　“アラガミ”として、私の？

違う！！　こんなの、私じゃないっ！！！

私は……っ、“アラガミ”だけど……っ！

“アラガミ”だけど――……アゲハだっ！

私が想像していたより、私が考え込んでいる時間は長かったみたい。
ハッと我に返った時には、“シユウ”の顔が目の前にあった。私は咄嗟に間合いをとろうと後ろへ下がろうとするけど、さっきとは逆に“シユウ”に抱き付かれてしまい、“シユウ”の腕が私の両翼をがしっと掴まれる。突然の出来事に私の身体はバランスを崩し、

“シユウ”に抱き付かれたまま背中から地面に叩きつけられた。
必死に両腕を解放すべく“シユウ”の腕の中でもがくけど、やっぱり力はまだ“シユウ”の方が上だったみたいで、私は何もできなかった。一瞬の油断がこうも戦局を一変させるとは予想外だった。

不意に、“シユウ”が大きく口を開ける。嫌な予感がした。そしてその予感は、当然の如く的中する。
“シユウ”が私の細い首筋に牙を立てた。今度は逆に私を喰らうつもりなんだ、“シユウ”は。

「嫌ああぁっ！！」

首筋に激痛が走り、それから逃れようと更にもがいてみるけど“シユウ”は変わらず私をしっかり抱きしめ、身動き一つとらせてくれない。こうなったら頭の目から光線を放って――……っ！
そう思って第三の瞳に力を集中させ始めたそのときだ。

「――アゲハから離れろっ！」

そうだった、私は一人じゃなかったんだ。横目でこちらに神機を構えて走ってくるコウタの姿を見る。……みっともないなぁ、あんな啖呵切っといて、結局彼らに助けてもらうなんて。でも、私だって黙って助けられるだけじゃ済まさない！
コウタの神機から発射された弾丸は“シユウ”の背中に直撃し、思わぬ衝撃に“シユウ”は私を解放して大きく後ろへ仰け反った。その瞬間、私は第三の瞳に溜めた力を一気に放出する。放たれた拡散型の光線は拡散する前に“シユウ”の頭に直撃し、“シユウ”の頭が首と“さよなら”する。普通の生物ならこの時点で即死だが、“アラガミ”は体内のコアを破壊しない限り身体が再生してしまう。

――そこで、アリサの出番だ。

アリサは神機の形態を変化させ、頭部を失って後ろへ倒れようとする“シユウ”に向かって“それ”を放った。そう、神機が“シユウ”の身体に噛み付いたのだ。神機が文字通り、“シユウ”の身体を――体内に存在するコアを捕食する。捕食の終わった神機から解放された“シユウ”はそのまま背中から地面に倒れ、そしてもう動くことはなかった。

やがて“シユウ”の身体、細胞が再生能力を失い、腐ったかのように黒く変色して地面に崩れていき、そしてそこには何もなくなった。

私も、コウタとアリサと同様にふぅと安堵の息を吐く。ゆっくりと地面に降り立った私の元にコウタが歩み寄って来て、右手の掌を私に向けながら高々と掲げる。

ああ、多分、こうすればいいんだろうな。

私はコウタの掌を、自分の翼で軽く叩いた。

パァン、と乾いた音がした。

5. 覚醒

「……サクヤ、どう思う？」
「う～ん……難しい質問ね。“彼ら”に直接聞くのが一番じゃないかしら？」
「質問に答えろ」
「分かるワケないでしょ？　“サリエル”の堕天種とコウタ、アリサが一緒にいる理由なんて。とても敵対しているようには見えないし……」
「とりあえず合流するぞ。ただし、警戒を怠るな。いつでも攻撃できるようにしておけ」
「了解しました、リーダー代理！」
「……」
「あ、ごめん。冗談だってば、ソーマ。そんな怖い顔して見ないでよ！」
「フン……」

“シユウ”を倒した私達は暫くその場で休んでいた。私とコウタは隣同士で建物に凭れ掛かるように座り、アリサは私達と少し距離をとったところで同じようにして座っている。二人とも“回復剤”と呼ばれる飲み物を飲んでいた。それを見ていた私に気付いたコウタが『飲むか？』と私にそれを差し出す。戸惑いながらもそれに口をつけると、私はそれをすぐにコウタに返した。……不味い、これは私が飲めるようなものじゃない。そんな私を見ていて、コウタは

くすくすと笑う。
アリサは私達の方を見ようともせず、ただ空を見上げていた。何か考え込んでいるようにも見えた。大体想像はつく。多分、私という存在のことだろう。

私自身、このままこうしてコウタ達と一緒にいてもいいのか、分からない。
私が“アラガミ”であるという事実。人間とは相反する存在。
今のように“人間のように”ずっといられるのならいいんだけど、私の中の“アラガミ”がさっきのように暴走しないとは限らない。

――ドクン、と突然私の身体が脈打つ。

『……どうやらお前にこの私の力を貸してやったのは間違いのようだな』

えっ？

『私の力を以ってしても、あの程度の“アラガミ”を人間の力を借りなければ倒せぬとは幻滅だ』

――私の頭の中に直接響く声。あの時の女の人の声だ。違う、コレは……私の声？

「あ、サクヤさん、ソーマ！」
「……まずはそいつについて説明してもらおうか」

『さあ、先程は私が力を貸してやった。今度は私が借りる番だ』

借りる？　何を？

「ソーマ、ちょ、ちょーっと待ってくれよっ！？　コイツは、アゲハは敵じゃない！！」
「へぇ、コウタってばこの“サリエル”にもしかして一目惚れ？　名前なんかつけちゃって」
「サクヤさん、そういう言い方はやめてくれよっ！　アリサ、お前からも言ってくれ！！」
「……アゲハは、“シオ”のように人の言葉を話すことが“アラガミ”です。ですが――……」

『お前の身体に決まっている。もっとも、返すつもりはないがな』

待って！　私の身体を借りるって……それで一体何をするつもりなの！？
途端、私の身体がドクンドクンと激しく鼓動を始める。私の意識がどんどん闇に引き擦り込まれて行く。必死に意識を保とうと抵抗するのだけれど、私の中の“何か”の力は強力だった。私の身体はあっという間に自分の意思では動かせなくなり、それでも何とか口をぱくぱくと開き、喉から声を絞り出す。

「――っ！　様子が変だ、お前ら離れろっ！！」
「アゲハ……っ！？　おいアゲハ、どうしたんだよ！？」
「コウタ！　とにかく一旦こっちへっ！！」
「何なの、コレは……っ！？　今まで感じたこともない、悪寒が……」

コウ、タ……。

ニ、ゲ……テ……。

『さようなら、もう一人の私。私の中で永遠に闇に包まれるがいい』

私の意識が、完全に闇に飲み込まれた――。

ふむ、どうやら成功したようだ。
大きく深呼吸し、私はゆっくりと両の翼を動かして身体の具合を

確認する。先程の“シユウ”との戦闘で負傷した首筋も、今では傷跡すら残っていないようだ。……これから狩りをするのに万全の状態だ。

さて、と私は目の前で私を見上げる４人の人間を順々に眺める。コウタとアリサ、そして多分後から来た男の方がソーマで女の方がサクヤだ。どれもまだ若く、張りのある肌をしている。肉も柔らかくて美味そうだ。これだけの量があれば少なくとも今の腹を満足させることができるだろう。とにかく今は腹が減って仕方がない。“私”は“シユウ”を少ししか齧らなかったからな。まったく、私の力を使っているときに一気に喰らってしまえば良かったものを。愚かな“私”だ。

「アゲ、ハ……？」

コウタが恐る恐る口を開く。ふん、“アゲハ”か。まあいい、事実を伝えてやるとするか。

「愚かな人間よ、貴様達がアゲハと呼ぶ存在はもういない。今の私は……貴様達人間共が“サリエル”と呼ぶ存在であり、それ以上でもそれ以下でもない」

「何だと……っ！？　アゲハはどうした！！」

「……残念だが、ヤツが“表”に出ることは二度とない。私の中に封じ込めさせてもらった。まぁヤツは十分に楽しんだだろうからな、次は私の番という訳だ」

ギリリと歯を鳴らしながら、コウタが私に神機の銃口を向ける。本当に愚かな男だ、一から十まで全て説明しないと理解できないのだろうか。貴様が大事にしているアゲハと私は一心同体。つまり私が死ねばアゲハも死ぬ、と。

お喋りはここまでいいだろう。と、そう思った時、今度はソー

マが口を開いた。

「本当に人間の言葉を話すことができるんだな……。なら敢えて聞く、お前は一体何なんだ。人間の言葉を話す必要があったとでも言うのか？」

「私という存在がこの身体に生まれたのと同時だ、ヤツが人間と同じように感情を持つようになったのは。きっかけは子供を喰らったときのようだが……理由など知ったことか。その瞬間に私はヤツの意識の元に生まれ、そして人間の言葉を発するようになった……それがどうしたというのだ？」

「別に……ただの興味、だ！」

「待てソーマっ！」

途端、コウタの制止にも関わらずソーマが地面を蹴って跳躍し神機で私に斬りかかる。ふん、面白い。

せいぜい喰われぬよう抗ってみせよ、人間共。私もせいぜい遊んでやるとしようか。腹は減っているが、とりあえずはこの身体に慣れておかねば……な。

ソーマの振り上げた剣状の神機が私の脳天目掛け振り下ろされる。空中で自在に動くこともできぬ人間が飛び掛ってくるとは笑止。私は瞬時に身体を回転させて横に移動すると同時に、私が先程まで浮かんでいた場所に光球を生じさせる。“私”が生成したものとは比べ物にならないほどの大きさだ。言うなれば、先程の“シユウ”の生成する火の玉と同程度の大きさ。勢いよく縦に振り下ろされた神機は留まることはできずに光球に斬りかかり、そしてその衝撃により光球が爆発する。

「ぐぉあっ！！」

爆発を直撃したソーマの身体は大きく吹き飛ばされ、そしてその

まま地面に激突した。それを私は鼻先で笑うと、ゆっくりと残った3人に向き直った。

「そんな……あのソーマをいとも簡単に……っ！？」

そんなに怯えた顔をしなくていい。

遊んでやるから、少しは楽しませてくれよ、人間。

人間であることの絶望を、味わわせてやろう。

“ゴッドイーター”とはいえ、所詮人間……この程度か。こんな奴らに喰われていった同胞達はさぞ無念だろう。……いや、それは脆弱な同胞達が悪いだけであり、別に同情する義理も必要もない、か。ふふ、それも違うな。私が強大過ぎるのだ。素晴らしい身体と力を授けてくれたものだ、万物を創造する神とやらがいるのなら感謝しなければならない。

……そうだ、私自身も“神”なのだ。ただし万物を破壊し、喰らい尽くす“アラガミ”なのだ。数多に存在する“アラガミ”の中で頂点に立つ存在、それこそがこの私に違いない。

私は勝ち誇り、甲高い声で笑う。私こそが最強の“アラガミ”なのだ。先程のわずか数秒がそれを証明している。私達の天敵とも言われる“ゴッドイーター”を軽々と一蹴したのだから。

ソーマの次に攻撃を仕掛けてきたのはサクヤだ。銃形態の神機で

私にレーザーで攻撃する。“サリエル”種のどの部分が装甲が弱いなど熟知しているようで、第三の瞳やスカートを集中して狙ってくる。私はそれを避けることもしなかった。当然だ、そんなもの効きはしないからだ。先程の“シユウ”でさえ弾いた攻撃を、この私の身体が弾けないはずがない。当然の如く全てのレーザーは私に命中すると同時に、光を鏡で反射したかのように屈折した。驚いた表情を見せるサクヤだったが、その表情はすぐに変わった。

私は第三の瞳から瞬時に拡散する光線を放つ。上空と前方、二方向に同時だ。後者は一直線にサクヤを目指すが、サクヤはそれを走って回避することはできないと判断して跳躍する。だが、その動きを計算して前者を放ったのだ。前方へ発射された光線は軽々と避けられたが、上空へ放った光線は一定の高さで上昇を終え、そのまま地上のサクヤ目掛けて急降下する。それに気付いたサクヤは神機を盾にしてやり過ごそうとするが、当然それにも限界がある。一発の光線がサクヤの腹部を貫き、サクヤは口から血を吹きながら地面に転げ落ちた。

時同じくしてアリサが私の死角に回り込んで不意打ちを仕掛けようとしていたのも、私は気付かないフリをしてやっていた。殺気に満ちた気配で分かる、アリサは自分の真後ろにいることに。斬りかかるつもりか、背中に弾丸を喰らわせるつもりかは分からなかったが、とりあえず私は上空へ急上昇してアリサの視界から消えた。下から驚いたようなアリサの声が聞こえる。私は空中で宙返りをしてアリサの姿を確認すると、そのままアリサの背後へと降り立った。振り返った頃にはもう遅い――私は両翼を広げて毒粉をアリサに向けて撒き散らす。それを吸い込まないように息を止めて口元を腕で押さえるアリサだったが、私が急上昇する勢いで膝蹴りを鳩尾に直撃させると今度は両腕で鳩尾を押さえて地面にうずくまった。呼吸がしたくともできない状況、どうするか見物だったが私は追い討ち

をかけるようにさらに毒粉を撒き散らすと先程と同じ位置に――コウタの前へと移動した。

そう、今この場で立っている“ゴッドイーター”はただ一人、コウタだけだ。コウタが私に攻撃を仕掛けてきていたのなら他の奴らと同様に地面に倒れている頃だろうが、彼は銃口を私に向けたままガタガタと震えていた。私を恐れている、というのももちろんあるだろうが、恐らく“私”のせいで攻撃を仕掛けようにも仕掛けられないのだろう。

愚かな男だ、喰らうべき存在に妙な思い入れをするものではない。

私も、そして“私”も、人間の言葉を発することはできても“アラガミ”には違いない。

喰らうべき存在、ただそれだけなのだろう？　貴様達“ゴッドイーター”からすれば、な。

喰らうのか、喰らわれるのか。今この場を支配しているのはその二択のはず。

それなのに、どうして新たな選択肢を創り出そうとする――？

私には、分からない。

「……どうした、かかってこないのか？」

私はゆっくりとコウタに口を開く。神機の銃口は私の顔に向けられてはいるが、トリガーが引かれることはない。注意してそのトリガーに掛けられた指を見てみると、案の定引こうとして力を入れるが身体がそのまま引いてしまうことを許していないようだ。

このままだと埒があかない。コウタを殺して喰らってしまうことは簡単だが、それではつまらなさ過ぎる。私は今“遊んでやっている”のだ。自らの絶対的な力をより実感するため、そして“ゴッドイーター”の無能さを知らしめるために。

だから、私はコウタにトリガーを引かせるために挑発する。

「――貴様は言ったな。“私”が人間や“アラガミ”にとっての“希望”である、と。だが現実はどうだ？　この状況は、お前が想像していた“希望”とやらとは程遠いものだろう？」

「……違う」

「違う、だと？　フン、貴様は私さえ出てこなければ――などとくだらないことを考えているのではないか？　それこそ違う。私は、言うなればもう一人の“私”の負の感情から生まれた存在。私が思うこと、行うこと、言うこと……全てもう一人の“私”が起こし得ることだ」

私は嘲笑して続ける。

「私がこうして出てこなくとも、貴様の真意を知ったもう一人の“私”はどうしただろうな？」

「俺の真意だと……っ！？」

ピクン、とコウタが繭を吊り上げた。ようやく躊躇、恐怖以外の感情を表情に出す。

「あのまま貴様が“私”を“アナグラ”とやらに連れていった末路は容易に想像できる。“人の言葉を理解し、話すアラガミ”――さぞ興味深い研究対象だろうな？」
「そんな事はしない！　絶対にさせない！！」
「言い逃れようとするな！　貴様は“私”を“アナグラ”に連れて行って、ただ仲良しごっこをしたかっただけだと言うのか？　馬鹿馬鹿しいっ！！」
「違う……俺は、俺はっ！！」
「何も違わない！　貴様は“私”という存在に自分勝手に己の“希望”――いや、“欲望”を曝け出し、ただ単に“私”を利用したかっただけなのだ！！」
「違うっ！！！」

ドン、という神機から弾丸が発射される音がした。だけどそれはコウタの神機から放たれたものではなく、もっと遠いところからの――……。
それが私の背後、それもかなり距離があるところから放たれたものだと分かったのは、弾丸が私の背中に命中して爆発した後だった。
……迂闊だった、まさか“もう一人”いたとは。フン、だが何人増えようが所詮は烏合の衆だ。そんな攻撃では私に傷一つ付けることもできん。
「後ろからとは……さすがに“アラガミ”相手だと容赦がないな」
振り返り、私はその姿を確認する。“それ”は剣のようなものを手に持ったまま建物の屋根から屋根へと駆け、やがてあの花畑がある建物の屋根で止まった。
見上げた私と目が合う。その瞬間、“それ”は鼻先で笑った。

「私を見下ろすな……下衆な人間風情が……っ！！」
「へぇ……喋れるんだ。でも、その下衆な人間に倒されるお前の方が、よっぽど下衆な存在だと思うんだけどな……」
「――アイっ！？」

コウタが“アイ”と呼んだその女は、再び鼻先で笑うと、タンッ、と屋根を蹴って高く飛び上がった。同時に神機の形態を銃に変化させ、その銃口を私に向ける。
愚かな、また私に空中戦を挑むか。私はコウタには目もくれず、一直線にアイに向かって急上昇した。一撃で返り討ちにするため、第三の瞳に力を集中させながら。
トリガーを絞る瞬間、アイが小さく呟いたのを私は聞き逃さなかった。

「お前の生い立ちには同情する……だから――……」

「確実に、殺してやる」

6. 決別

アイに向かって飛んだ私は即座に第三の瞳に力を集中させ、光線を放つ。それとほぼ同時にアイがトリガーを絞った神機の銃口から一発の弾丸が放たれる。

交差する光線と弾丸――それぞれが接触することもなければ、それによって軌道が変わることもない。それぞれは一直線に互いの獲物に一直線に飛び、そして直撃する。

アイの放った弾丸は私の第三の瞳に当たる。私の今の身体の硬度ならやはり簡単に弾き返すだろうと思っていた私の予想は外れ、それは私の第三の瞳に突き刺さった。同時に私の光線もアイに当たるが、アイは瞬時に神機の形状を剣に変化させて拡散する光線全てを剣で弾き飛ばし、無傷だった。

先の人間共とは実力がまるで違うようだ。だが、ここは空中だ。私のテリトリーで空も飛べない人間風情が私に勝てる筈がない。

そう思ってそのままアイに突進を仕掛けるべく更に速度を高めた、その時だった。

突然、私の身体が自由に動かなくなる。それに伴って上昇していた私の身体はゆっくりと速度を落とし、やがて私は身動きが取れないまま重力に引かれて落下していく。

アイも同じく落下するだけだが、人間の癖に器用に空中で体勢を整え、再び銃形態に戻した神機のトリガーを絞り続ける。

私のそれのように雨のように降り注ぐ弾丸。私はどうすることもできずに全ての弾丸をその身に喰らい、そのまま弾丸の勢いに押されるように地面に激突した。高く舞い上がる土埃のせいで視界ははっきりしないが、先程受けた弾丸のダメージは感覚で分かる。最初

の一発とは違い、傷一つ付けられていないようだ。比較的もろい第三の瞳は弾丸を弾き返すことはできなくとも、その他の箇所なら問題がない。すなわち、第三の瞳への攻撃にさえ注意していれば良いだけだ。

私の身体はまだ自由が利かないままだ。どうやら最初の一発は特殊な弾丸のようで、“アラガミ”の身体機能を奪うような代物なのだろう。だが、それも一時的なものだ。第三の瞳の傷が癒えていく。それと同時に私の身体も少しずつ動かせるようになっていった。

スタン、とアイが私のすぐ近くに着地する音がした。少ししてアイとコウタの会話が聞こえてくる。

「アイ、お前特務で単独行動中だったんじゃ――」

「詳しくは後で話すけど、偶然、対象がキミ達のミッションと同じになっただけ。“アレ”は私の獲物だけど、キミ達の獲物であることにも違いはない」

「待ってくれよ、アイツを……アゲハを殺すのか？」

「……キミと“アレ”の間に何があったかは知らない。けど、どんな理由があろうとも“アレ”は今のうちに倒さなきゃ、もっと大変なことになる」

「お前……アゲハのことを知ってるのか？」

「……」

「黙ってないで答えろよ！　お前の特務と関係があるのか！？」

「黙るのはキミの方。早くソーマ達にリンクエイドをお願い。……キミは戦わなくていい、私達で充分」

「おい、アイっ！！」

……フン、くだらない。私の何を知っているというのだ。私は“アラガミ”を超越した存在、私こそが神なのだ。虫けらが何をほざこうが、私には関係がない。

私はただ、手応えのありそうなアイという“ゴッドイーター”を

倒し、そして喰らう。コウタも、アリサも、サクヤも、ソーマも……そして全ての“アラガミ”と人間もだ。

もうお遊びは止めだ。

全員、喰らってやる。

身体が動くようになった瞬間、私は瞬時に宙に飛び上がって舞い上がった土埃を翼で吹き飛ばし、視界を確保する。周りを見てみると、倒れているサクヤに何かをしているコウタの姿、そして変わらずに倒れているソーマとアリサの姿があった。だが、アイの姿がない……？

「――どこ見てるの？」

上か！

見上げた時には既に遅かった。アイの神機の刃が私の脳天に迫る。私は咄嗟のことに身動きができず、そのまま剣撃を受けるしかなかった。だが、甲高い音とともに私の身体は神機の刃を弾き返し、アイは空中でバランスを崩す。私はその様子を見て鼻先で笑うと、光壁を私の周りに放ってアイを一旦吹き飛ばそうとした。だが、アイの動きの速さは私の予想を遥かに上回っていた。

瞬時に銃形態に神機を変化させたアイは、その銃口を私に向けて何度もトリガーを絞る。当然その弾丸は私の身体に弾かれるだけだったが、アイはその反動を利用して私から離れたのだ。そう、私の光壁が届かない距離まで。

光壁を広げた私はすぐにそれを消し去った。光壁を出している状態の私は無防備だからだ。それにしても、同じように剣と銃を使い分けているのはアリサと同じだったが、アリサとは動きが違い過ぎる。私の行動を先読みして瞬時に判断してから行動しているようだ。

「……良い動きをするな、アイとやら。貴様が“ゴッドイーター”共の親玉といったところか？」

対峙しているアイに向かって、私は口を開く。

「別に……」

「まあいい、貴様ももう分かっているのだろう？　貴様らの扱う神機とやらでは、私に満足にダメージを与えられないということに」

「哀れだね」

「……何だと？」

「お前はただ自惚れているだけ。そう、哀れな程にね。お前がこうして時間をくれている間に、４対１になった」

アイの挑発的な言葉に怒りを覚えた私は、癒えたばかりの第三の瞳から光線をアイに向けて発射させる。アイはそれを避けようとはしなかった。だが、突然アイと私の間に入った影があった。……アリサだ。アリサは神機のシールドを展開させ、真正面から私の光線を受ける。

「残念ですが、こちらのシールドも結構な硬度があるんですよ」

光線を全てシールドで防いだアリサが、シールドを解除して剣形態に神機を変形させながら不敵に笑う。小癪な……っ！

アリサごとアイを貫くべく更に強大な光線を放とうと第三の瞳に力を集中させ始めたその瞬間、一発の弾丸が別方向から飛んできて第三の瞳に直撃し、弾丸は私の集中させた力と共に爆発した。衝撃に私は思わず怯んでしまうが、それでも空中でのバランスを保つ。が、それも数秒で終わった。

背後から勢いよく飛び掛ってきたソーマが私の脳天に強烈な一撃を放つ。剣撃としての威力は大したことはなかったが、その剣撃の力が私の身体を空中から地面に叩き落とした。

「ソーマ、フォローありがとっ！」

「……うるさい」

サクヤとソーマの声がした。アイの言った通り、全員が私の攻撃から完全に戦線に復帰しているようだ。

私は腸が煮え繰り返るほどに憤怒していた。小癪な真似をする“ゴッドイーター”に対し、そして何より人間風情にいいように攻撃される私自身に対し。

私はすぐに空高く舞い上がろうとした。だが、それよりも早く“二つの口”が私の身体に噛み付いた。

“二つの口”――アイとアリサの神機だ。その二つの神機が私の身体に喰らいつき、そして血肉を喰らっているのだ。私の硬い皮膚がメキメキと音を立てて裂けて行く。

「離れろおぉぉぉっ！！！」

私は身体を回転させてアイとアリサを吹き飛ばし、空中へと舞い上がる。だが上手く飛ぶことができず、中途半端な高さで私の身体は上昇を止めてしまった。

それが、ヤツらに絶好の好機を与えてしまった。

アイとアリサが並んで私に二つの銃口を向けていた。

「お前の身体が硬いことはよく分かった」

「でも、“自分自身の攻撃”に耐えられますか？」

同時に二人はトリガーを絞った。銃口から飛び出したそれは、見間違うはずのない、私の光線だった。

いくつも拡散した光線。それらの全てが、私の身体を貫通した。

私の身体は地面に突っ伏したまま、力が入らない。

何度試そうとも、自分一人だけでは立ち上がれる気配すらない。

光線に撃ち抜かれても、不思議と痛みは感じなかった。

私は……負けたのだろうか。

このまま、死んでしまうのだろうか。

先程の“シユウ”のように、跡形もなく消えてしまうのだろうか。

自分が負けたことが信じられなかった。

強靭な身体を手に入れても、私は“ゴッドイーター”には敵わなかったという事実。

自分を神だと驕っていたという事実が突きつけられる。

……私は、何だったのだろうか。

もう一人の“私”と同じように、こうなってしまっては自分の存在意義など見出せるはずがない。

私は、自分が神であると信じていた。

神で在ることが私がこの世に存在する理由だと信じていた。

それが否定された今――。

私は、そして“私”は一体、何なのだろうか。

「お前の敗因は……自惚れていたこと。そして、私達人間を甘く見ていたこと」

薄っすらと開いた私の目に、私を喰らおうと神機を変形させているアイの姿が映った。

もう抗う気力もなかった。ただ脱力感だけが私を支配していた。

私は、空虚だった。

「――待ってくれ！　アゲハを殺さないでやってくれっ！！」

私は驚いた。コウタが身を挺して私を庇っているのだ。こんな中途半端な存在である私を……。だがコウタ、私には本当にお前が何を考えているのか分からない。

それほどまでにもう一人の“私”を――アゲハを望む理由が。本当に、アゲハと仲良しごっこをしたいだけなのか？　本当に、アゲハが人間と“アラガミ”の共存の鍵を握る存在だと思っているのか？

――……だとしたら、大馬鹿者だ。

でも、私も大馬鹿者だ。コウタに負けないくらいの、な。

「コウタ、どいて。早くしないとサリエルの身体が再生しちゃう」

「どかない！　例えアイの命令でも、俺はどかない！　俺は、アゲハを守るって決めたんだ！！」

「そのアゲハが暴れ出し、私達に攻撃を仕掛けてきたことをもう忘れたんですか？　アイが来てくれなければ、私達は今頃……」

「それでも俺は――」

「『とある研究所から実験で人工的に生み出した“アラガミ”が逃

亡した。その“アラガミ”は“対アラガミ”用の生物兵器として生み出されたものの不完全な存在で、研究中は驚異的な速度で進化を繰り返していた。このまま進化を続ければ“神機使い”でさえも歯が立たなくなる恐れがある。早急に見つけ出し、殲滅せよ』」

「……何だよ、それ」

「私の特務の内容」

「じゃあ……アゲハが、その“アラガミ”なのか？」

「……そう」

「……っ！　それでも俺はここをどかないっ！！」

私が、人間に作られた存在？

……フフ、悪い冗談だ。悪い、冗談……だ……っ！

私が人の言葉を話すことができるのも、人間の生物兵器として生まれたから順応しただけか？

人間を喰らうことによってそれに目覚めたというのか？

私という存在が生まれたのも――……っ！

……だが、待て。

だとすれば、生き延びさえしていれば身体は進化していき、本当に神の如き強さを得られるのだろうか。

今の私は不完全体だとすれば、完全体になった時、本当の意味での神になれるのではないのだろうか。

そうか。そういうことか。

やはり私は神になるためにこの世に存在しているのだ。

今は“ゴッドイーター”に屈しても、このまま進化を続ければ……っ！

今回の敗北も私が進化するに必要な出来事なのだ！
このままコウタに守られ、私の身体を完全に癒すことができたとき、私はまた一つ完全体に、いや神に近付くということだ！

さぁ、愚かなコウタよ。私のために時間を稼げ。身体が癒えたとき、礼として真っ先にお前を喰らってやろう。光栄に思うがいい、神と一つになれることを、な。

『そんなこと、させない……っ！！』

私の頭の中で直接声がする。封印したはずの、もう一人の“私”の声だ。
フン、私の意識が薄れていたせいで私に声を発するまでに解放されたか。だがお前は神に相応しい器ではない！　私こそが！　この身体を以って神に成り上がるべきだ！

『神とか“アラガミ”とか人間とか関係ない！　コウタ達を死なせたくない！！　だから私は、あなたを止める！！』

私を止める、だと？　面白い、やってみるがいい！
お前の考えていることなど容易に想像できる！　だがそれでは私を葬ると同時に自らも死ぬことになるぞ！！　人間共、いやコウタと共に仲良しごっこさえできなくなるのだぞ！！　それでもいいのか、“アゲハ”よ！！

『……一緒に、死にましょう。私もあなたも……ううん、この身体をこの世に存在させちゃいけない。だから――』

な……っ！？　待て、早まるな！！　神になれるのだぞ！！
神になった暁にはこの身体を時折貸してやっても構わない！！

全ての生物の頂点に立てるのだぞっ！！

待て、アゲハ！！

私の話を聞けええええええええええっ！！！！！

『ごめんね、もう一人の私。あなたも危険だけど、この身体はもっと危険だから』

『だから、壊さなきゃ。私達もろとも――……』

私の身体は想像以上にダメージを受けてるけど、やっぱりこの身体の再生速度は凄まじく、ついさっきまで“私”が動かせなかった身体も今ではちゃんと動く。と言ってもゆっくり動かすのが精一杯だけど、それでもこの身体を壊すには充分だ。

両翼を地面について、ゆっくりと身体を持ち上げる。ボロボロと私の身体が欠けて地面に落ちて行く。この欠けた部分も、少ししたら完全に再生してしまうんだろう。

「アゲハ、なのか……？」

私に気付いたコウタが振り返り、不安そうに口を開く。

そうだよ、コウタ。ちょっとだけ、久しぶりだね。でものんびりと話している時間はないみたい。私の中でもう一人の“私”が身体を乗っ取ろうと暴れているから。そして、私の身体が再生しちゃうから。

私はゆっくりと口を開いた。でも身体はまだ再生の途中だから、上手く言葉を発することができなかった。

「ワ…タ、シ……コロシ……テ……」

「なん、だって……？」

「ワタシ……ヲ……コロシテ……」

今の私にはこれくらいしか喋れなかった。でも、意味はちゃんとコウタに伝わったみたい。

「……っ、んなことできるワケないだろうが！！」

……そういうと思った。

ホント、コウタは優しいんだから。

嬉しいよ、ホントに。

大好きだよ、そういうところ。

私はコウタの後ろにいる“ゴッドイーター”達を眺めた。

アイも、アリサも、サクヤも、ソーマも。

皆、いつでも私に攻撃できるように神機を構えててくれていた。

……ごめんね。

ホントに、ごめんね。

時間がないから、すぐに私の身体を破壊するためには“コレ”しか方法がないの。

ポロリ、と私の目から涙が毀れた。

そして、私は――……。

「……ゴメン、ネ」

最後にそれだけ呟くと。

弱々しいけど、それでも力一杯コウタの頬を翼で殴った。

不意打ちだったせいか、予想外だったせいか。

コウタは受身を取ることもせずに、地面に倒れた。

「コウタっ！？」

「……っ！　コウタ、悪いですが……っ！！」

「再生されるワケにはいかない……」

「……恨みたければ、恨んでくれていいから。私達は、任務を遂行する」

無数の弾丸と斬撃を浴びながら、私は口を動かし“ありがとう”と言い、笑った。

意識がなくなる寸前、私はコウタの方を見た。

地面にうつ伏せたまま、泣いているみたいだった。

……。

……。

……。

ありがとうコウタ、そして皆。

私、“アラガミ”だったけど、皆に会えてとっても嬉しかった。

できれば、もっと一緒にいたかったな。

……。

“神様”、お願い。

もし、私が今度生まれ変わる事を許されるのなら――……。

人間に、なりたいな。

コウタ達と一緒に、話したり遊んだりしたいな。

いつの日か、そんな日が来ることを夢見ながら――……。

私は静かに、意識を永久の闇の中へと沈めた。

エピローグ

「――……うん、検査結果も良好だ。アゲハ、もういいよ」
「はい」

榊博士の研究室――そこでベッドの上に裸で寝かされて身体の状態を調べてもらっていた私は、博士の言葉に従ってゆっくりと半身を持ち上げ、ベッドから降りた。脱いでいた下着を着ながら、私は博士がじっと私の方を見ているのに気付き、私は咄嗟に“両手”で胸と下半身を押さえる。

「博士……目がやらしいです」
「い！いや！　別にそんなつもりじゃないんだよ！？　ただ、大分人間らしくなってきたなーと思ってね」
「ホントですかぁ？」
「ホントだって！」

まぁ、博士には散々私の裸見られてるから今更気にしても仕方がないんだけど。

「……それにしても驚いたよ、まさか体内に“コア”とは別に人間と同じ“心臓”を形成していたなんて」
「私だって驚きましたよ。まさか“目が覚める”なんて思ってもみませんでしたからね」

あの時――アイ達の攻撃を受けて、私は完全に死んだと思っていた。アイが私の“コア”を捕食しても私の身体が消滅しないのをおかしいと思って、この“アナグラ”に私の身体を持ち帰って検査した結果、私の身体は“コア”とは別に“心臓”があったらしく、私

は“心臓”のおかげで身体はボロボロだったけど何とか一命を取り留めたみたい。それ以来、もう一人の“私”の存在も私の中で感じていない。

“コア”はもうないせいか、私の身体は“人間らしく”なっていく一方で、“アラガミ”だった頃とはもう似ても似つかないくらいだ。翼だってほら、まだ翼だった面影があるけど人間の手のように5本の指がある。

“神様”にお願いをしたおかげかどうかは分からないけど、今は私、アゲハはこうして“人間”としてこの世に存在している。まぁ、まだ“人間”とは言い難い存在みたいだけど、それでも身体の構成やら何やらは人間とほとんど変わらないって博士が言ってた。博士の話じゃ人間の女性としての生殖器も形成し始めてるんだって。……もうちょっとしたらコウタを誘惑してみようかなぁ～……なんてね！　って、私ってばなんてはしたないことを……。

ガー、と音がして研究室の扉が開く。入ってきたのはいつものメンバーだ。服を先に着ていた良かった……博士ならともかく、コウタやソーマに見られるのはさすがに恥ずかしい。

「おっすアゲハ！　検査結果はどうだった？」
「うん、問題ないみたい。ありがとうコウタ」

「へぇ～、もうちょっと人間の身体に近付いたら他の皆に紹介できますね」
「えー、皆以外の人と接するのはまだ怖いよ、アリサ」

「……お前は“シオ”と同じく、異例中の異例だ。忘れるな」
「う～ん、よく分からないけど……とりあえずこれからも宜しくね、ソーマ」

「私達は皆あなたの味方だから、何かあったらいつでも相談してね。（コウタとの恋愛相談もしてくれていいからね）」
「ありがとうサクヤ。（ななな、何を言ってるんですか、私は別にコウタとそんな関係じゃ……っ！）」

「そろそろ人間の食べ物も食べれる？　今度、美味しいものを作ってあげる」
「その前にアイは美味しい料理を作れるようになってね。……乾パンとかじゃなくて」

あれから1ヶ月、今思えば色んなことがあって、1ヶ月前の出来事も何年も前のことだったように感じてしまう。皆とこういう風に話すのだって、何年も前からやっているような気がする。
私は結局、“アラガミ”でもなければ“人間”でもない、人に作られた中途半端な存在。だけど、私は今、“人間”としてこの世に存在している。“人間”として、人間と触れ合っている。

私は、幸せだった。
そう、とっても幸せだ。

いつか、誰もがずっとこんな幸せを感じていられますように――。

私はそう願いながら、ニコッと笑った。

『存在理由』　ＦＩＮ

Ｗｒｉｔｔｅｎ　ｂｙ　．黒鬼風斗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7668m/

存在理由　from ゴッドイーター

2011年10月7日15時18分発行